

景観フォーラム

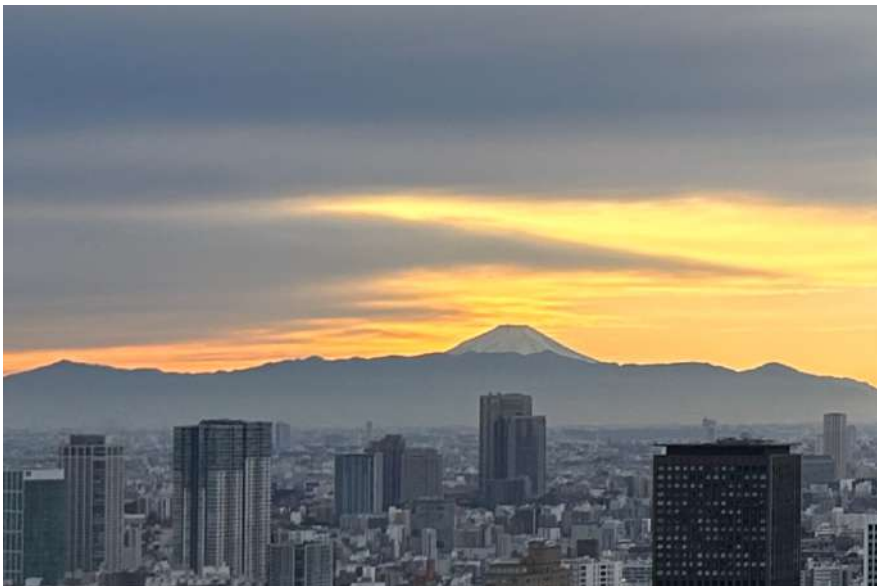
巻頭言

あけましておめでとうございます。第二次世界大戦が終了（1945 年）してから今年で 79 年目になりますが、その間、大きな戦争と言えばベトナム戦争でしょうか。資本主義と社会主義の代理戦争としてほぼ 10 年続いた戦争も多大の犠牲をもたらし 1975 年には終了いたしました。そして、一昨年 2022 年に始まったロシアによるウクライナ侵略戦争が未だ終局面を呈しておりませんし、今年で 3 年目になるうとしております。この戦争もロシアと米国との代理戦争と言えなくもありませんが、もしかしたら、プーチンという人物が存在しなかったらこの戦争は起きなかった戦争かもしれません。最近思うのですが、この戦争はプーチンの野望がもたらしているのではないかと、そして、その野望はウクライナに対してのみではなく、彼が生きている限り、あちらこちらで、戦争と言う形をとるのではないと思われる節が垣間見られます。プーチンは戦争と言う形をとることにより自らの独裁政治を維持するということではないかと思われます。これは思い出したくもありませんが、ヒトラーの再来と言えなくもありません。彼らの動機は同じなのですから。

さて、歴史から教訓を学ばなければならないとすれば、ヒトラーの狂気をもう一度明確にし、プーチンの狂った野望を世界の人々に理解させるようにする必要があるかと思われます。プーチンの野望は、民主主義とは相容れないものです。では、あのプーチンという人物は何故この民主主義を受け入れることができないのでしょうか。想像するに、プーチンの思考経路は、資本主義経済を支えている民主主義の政治形態というものは墮落した考え方に支えられており、社会主義経済社会を創造することにより民主主義というものが本来の形態を可能とするものであり、真の民主主義は、社会主義経済社会を創造することにより達成できるというのが彼本来の考え方ではないか。そのためには戦争と言う手段は効率のいい正当化できる方法である。これがプーチンの考え方ではないかと思われます。

しかしはっきり申し上げましょう。社会主義社会を望むことはいいとして、その創造のために、戦争と言う手段を用いることは歴史が許すわけはありません。歴史は、人類の生命を最上の価値としているのですから。これこそは景観論の考え方と全く同一であることを表明しておきましょう。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦



<日本景観フォーラム 2023 年度年間スケジュール>

*2023 年度とは 2023 年 4 月 1 日⇒2024 年 3 月 31 日のことです。

2023 年

- 4 月 24 日 (月) **第 1 回景観研究会** 総会・第 1 回理事会 (16:30～ オンライン会議)
- 5 月 30 日 (火) **第 2 回景観研究会** (16:30～ オンライン会議)
- 6 月 13 日 (火) **第 1 回景観まちあるき** 【浦賀】
- 6 月 20 日 (火) **第 3 回景観研究会** 於：JICA 研究所 18:00～
- 9 月 30 日 (土) **第 2 回景観まちあるき** 【品川東海道界限】
- 10 月 27 日 (金) **特別景観視察会**：宇都宮市にて LRT と大谷石の見学会
- 11 月 28 日 (火) **第 4 回景観研究会** 於：JICA 研究所 18:00～
- 12 月 19 日 (木) 忘年会

2024 年

- 1 月 19 日 (金) **第 3 回景観まちあるき** 【逗子】
- 2 月 20 日 (火) **第 5 回景観研究会**・第 2 回理事会 於：JICA 研究所 18:00～
- 3 月 22 日 (金) **第 4 回景観まちあるき** 【両国】

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

<日本景観フォーラム 2022 年度年間スケジュール>

*2022 年度とは 2022 年 4 月 1 日⇒2023 年 3 月 31 日のことです。

2022 年

- 4 月 12 日 (火) 15:00 東京都訪問 (神宮外苑再開発を問う)
- 4 月 19 日 (火) 16:00 オンライン会議 **第 1 回景観研究会**
- 5 月 20 日 (金) **第 1 回景観まちあるき** (神宮外苑・表参道)
- 6 月 21 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 2 回景観研究会** 第 1 回理事会
- 7 月 26 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 3 回景観研究会**
- 8 月 20 日 (土) / 8 月 21 日 (日) **特別景観視察会** (斑尾高原)
- 8 月 30 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 4 回景観研究会**
- 9 月 24 日 (土) **第 2 回 景観まちあるき** (王子・駒込界限)
- 10 月 25 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 5 回景観研究会**
- 11 月 29 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 6 回景観研究会**
- 12 月 3 日 (土) **第 3 回 景観まちあるき** (神保町界限)
- 12 月 20 日 (火) 16:30 オンライン忘年会

2023 年

- 1 月 21 日 (土) **第 4 回 景観まちあるき** (茅ヶ崎)
- 2 月 21 日 (火) 16:30 オンライン会議 **第 7 回景観研究会** 第 2 回理事会
- 3 月 23 日 (木) 16:30 オンライン会議 **第 8 回景観研究会**

散歩コースで見つけたもの

豊村泰彦

12月のある日、久々に「景観とは何か」という難題について頭を振り絞って30分ほど考えた。しかし、いくら懸命に考えても、一文字も頭に浮かんでこない。諦めかけたそのとき、何となく一つの考えがひらめいた。それは、景観というのは抽象概念であり、人によって解釈も考えも違うものである。だから簡単にイメージが描けるわけがないのだ。ということでこの切羽詰まった年末に考えるのは無駄だと素直にあきらめた。今できるのは、私が日常散歩する中で漠然と眺めている風景を、客観的に眺め直し、景観として再確認し、それを伝えることで「景観とは何か」を読者に考えてもらうことだと知った。

■円融寺

私の散歩コースに、円融寺（目黒区碑文谷一丁目）という古いお寺がある。小さな門をくぐり、狭く細長い参道の先に古そうな入母屋造の仁王門がある。建物には装飾的な彫刻が施されていて、その左右には江戸時代に碑文谷の黒仁王として親しまれた仁王像が存在感をアピールする。相当優秀な仏像彫刻師の手による作品なのだろう、強烈なパワーを感じる。

仁王門をくぐる先にある本堂が国指定重要文化財の釈迦堂である。ここは都内では2番目に古い木造建築だそうで、建立は室町時代初期と言われている。ここに始めて訪れた人は新鮮な感動を覚えるかもしれないが、毎週のようにここの前を通る私にとっては見慣れた風景だが、見るたびに新たな感覚を呼び覚ましてくれるお堂である。



■碑文谷八幡宮

円融寺の入り口のすぐ近くに、川を暗渠化した上を桜並木にした緑道が通っていて、その緑道を、西に少し歩くと鳥居がある。鳥居をくぐり参道の先は森となっており、その鎮守の森に向かって階段を上ると碑文谷八幡宮の本殿がある。創建年月は、明確ではないが、鎌倉時代まで遡ると言われている。社殿造営の記録が残るのは永正八年（1511）である。背の高い樹木に囲まれ、夏は涼しい。ここは私が毎年正月に最初に初詣をする神社であるが、毎年正月と9月の例大祭には大勢の人出で賑わう。出店が参道の両側に沿って並ぶ風景は昭和の時代から変わっていないのだろう。



■サレジオ教会

この碑文谷八幡の入り口の鳥居を北に目黒通りを目指して歩いていくと、やがて前方にロマネスク式建築の白亜の大聖堂が見えてくる。昭和29年、江戸のサンタ・マリアを記念して建てられたサレジオ教会（カトリック碑文谷教会）である。36m余の鐘塔を備え、ミラノの信者から寄付された鐘の音が異国の香りをもたらしている。カトリックの教会、由緒ある神社、寺が500m園内に集中しているというのもこの地域の特色かもしれない。



■謎の要塞住宅

サレジオ教会の近くで最近面白いものを発見した。個人の住宅だと思うが 玄関が見当たらず普通の窓やベランダもなく、明り取りのような隙間や穴の開いたコンクリートで外観を囲った要塞のような低層住宅である。敷地も鋭角な三角形の敷地に建ち、普通の住宅は建てにくい場所である。住宅は共同住宅と思われるが、どうやら腕のいい建築家が建てた住宅らしい。コンクリートを全体に使うところなどは安藤忠雄も設計しそうな建築物だが、こちらのほうがアート作品としての美しさがある。



■清水池公園

サレジオ教会から北東方面に 12, 3 分歩いたところには清水池公園という公園がある。公園の大部分は池であり、しかもここでは都内には珍しく釣りのできる公園として人気がある。この碑文谷が村だったころ水田灌漑用のため池として利用されていたところで、昭和 10 年に東京都が公園として認定し、その後昭和 27 年に目黒区が釣り堀池として整備したのである。池のある公園はサレジオ教会の北側に碑文谷公園もあるが、レギュラーの散歩のコースからはずれるので、今回はこの釣り堀池公園を紹介する。



■洗足図書館

洗足図書館は散歩コースというよりは家と洗足駅の途中にあって日常利用している区立図書館である。小規模だが自分にとっては家の一部といってもよいほど重要な施設である。2階建てのコンパクトな構造であるが、蔵書スペースほか閲覧室やこども図書館室が併設され、機能的で使いやすい構造である。図書数は少ないが、新聞は新聞、雑誌などの定期刊行物が閲覧もできるので、便利で、散歩や買い物の途中に利用している。外観もシンプルで周囲の閑静な環境とも調和する優れた公共施設だと思う。



■おわりに

なぜこんなプライベートな近場を取り上げたのかというと、去年は病気をしたせいで、思うような行動ができず、旅行やまち歩きがあまりできなかったせいもあるが、地元をまち歩きの対象として眺めるよい機会となったのかもしれない。今回は目黒区でも特別な場所や観光地にはならない、普通の住宅地にあるものを取り上げたわけだが、自分としては散歩スポットとしては十分に見所のある場所であったと再確認した。今回の経験をもとにさらに自分の身の回りの散歩コースの範囲を広げていけたらと考えている。（画像は碑文谷の田向公園）



三ノ輪から入谷 まちあるき

丹羽譲治

1969年、二子玉川～渋谷の路面電車玉川線が廃止され、日本初のショッピングセンター玉川高島屋がオープンしました。当時大学1年生で、瀬田交差点から少し入ったところに下宿してました。決して広くない平家で、玄関に入って右の4畳半でした。まわりは、田んぼがあり、静かな住環境でした。玉川線は5月10日に廃線となり、1977年に地下鉄田園都市線として郊外と渋谷を結んでいます。東京で現存する路面電車は、世田谷線と荒川線だけになりました。邪魔者扱いされた路面電車も地方では機能していて、最近では宇都宮で新設されていました。

10月27日(金)13時にJR大塚駅に集合しました。都電荒川線大塚駅前駅に移動して、終点三ノ輪橋駅を目指しました。大塚駅前駅周辺は整備され、同行者によると駅舎自体も変わってしまったとのことでした。一部を除き電車は専用軌道を走り、平日の午後でしたが乗客は途切れることなく車内は賑わっていました。車両の最後部に立つと運賃170円で景色を楽しめました。三ノ輪橋駅を降りると、小さなバラ園が迎えてくれました。荒川区が1985年よりボランティアとともに、沿線約4kmに整備したものです。駅舎は昔を偲ばせ、駅前のトイレも環境を意識したデザインで好感を持ちました。しばらく歩を進めると、左手に「JOYFUL MINOWA」という商店街がありました。すぐに途切れてしまうかと思えた商店街は、左に展開してました。味噌、米の量り売りをする店、商店街の中央に9時から営業する銭湯があり、トイレやベンチのある小さな公園もありました。ベンチでは、総菜店で買った弁当を頬張る男性がいました。商店街と直角に抜ける道が数箇所あり、残念なことに角の一軒の商店が3軒の住宅に新築されてました。救いは、他の脇道で我々が幼い頃していた路地遊びの子供を見かけたことでした。最近では、スーパーでもコンビニでも自動で支払うことが増えてきて店員と会話をすることがめっきり減ってしまいました。この商店街では店主との会話があり、いつもの「まちあるき」より参加者が手にたくさん袋を下げていました。安いこともあります、店主との会話が財布の紐を緩めた様です。商店街の趣と店主との会話が「昭和」を感じさせてくれました。商店街の最後にある八百屋を右に折れて行くと中島弁財天がありました。東日本大震災で配管等に被害を受け、閉業した「元弁天湯」の女湯の中庭にあった弁天様を安置したものです。商店街を戻り、三ノ輪橋駅近くの喫茶店に入ると都電の品々が展示され最新の宇都宮ライトレールの写真が飾られてました。

休憩の後、入谷方向に向かいました。JRの常磐線のガードを潜ると、四角い建物と点在するコンビニで形成されたどこにでもある風景が待ってました。境内に一葉の文学碑が建立されてる千束稲荷神社に立ち寄り、龍光山三高寺正寶院(飛不動尊)を訪れました。説明板に1530年に正山上人によって開かれたとあります。「飛不動尊」の由来により最近では、飛行機利用者、受験生までも参拝に来るらしい。次に酉の市で有名な鷲神社を訪れました。広い境内に立つと当日の賑わいが想像されました。最後に安産・子育ての守護神として信仰される1659年創建の入谷鬼子母神を訪れました。都心に点在する神社やお寺が都心の隙間のない環境に重要な役割を果たしています。氏子や檀家の減少で維持が大変と想像されますが、この空間を残して頂きたいと思います。決して大きくはありませんが、豊川稲荷や酒屋も残して欲しいと思います。



都電荒川線大塚駅前駅付近



都電荒川線大塚駅前駅



軌道を走る



一部一般道を走る



都電荒川線大塚駅前駅付近



三ノ輪橋駅前トイレ



JOYFUL MINOWA



駅から遠い商店街



3軒の新築住宅



江戸時代創業の蕎麦屋



中島弁財天



何処でも見られる街並み



千束稲荷神社



飛不動尊



鷲神社



入谷鬼子母神



豊川稲荷



酒屋

<LFJブックレビュー 82>

『自然の家』フランク・ロイド・ライト著 富岡義人訳（ちくま学芸文庫）

原著 1954 年刊

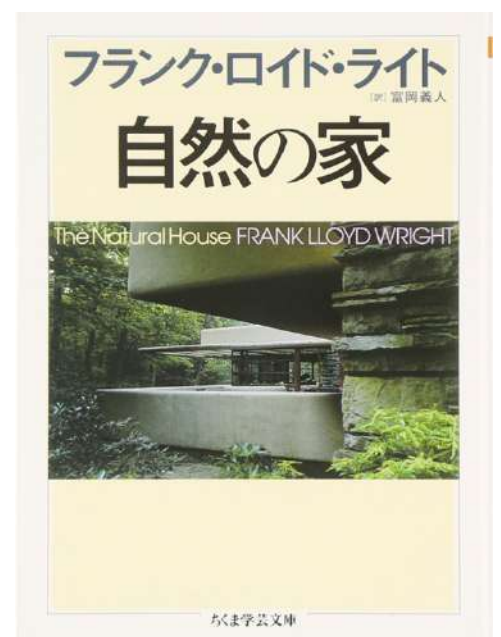
斉藤全彦

本書 The Natural House は 1954 年に刊行され、ライト(1867-1959)が実に 87 才という最晩年の著作である。ライトは若くしてアドラー＝サリヴァン建築事務所で働き始めるのだが、その才能を見込まれ 1888 年以降（当時 21 才）殆どの住宅設計を任せられた。26 歳で独立し、1893 年から 1910 年までの 17 年間に計画案も含め 200 件近い建築の設計を行い、かのプレイリースタイル（草原様式 Prairie Style）の作品で知られるようになった。即ち、彼は若くして自らの建築スタイルを以ってこの業界で勝負してきたと言えよう。

さて、幼いころ農場生活を経験したライトには「有機的単純性」という考え方が次第に膨らんできた。それは「峻厳でありながらも調和した秩序のなかで、意味のある個性をつくり出す。この秩序こそ自然という名で呼び習わしているものなのだ」という自覚に基づく。そしてライトの基本概念が生まれる。「私は本能から大平原を愛していた。それが偉大なる単純性を示しているからである。建物のなかの地面と平行する面を大地と同化させること」そして「人体寸法（ヒューマン・スケール）こそ建物の真の尺度であり、水平線を人間生活の地平（安らぎの線）と捉えることにした」ということになる。そして、建築のための究極的要素として、師サリヴァンから受け継ぐ、造形性 plasticity 即ち建築形態そのものに内在する成長力によって生成・展開する立体的造形の性格を基本とすることになる。ロイドはこれを連続性 continuity という概念に発展させ、建築要素を個々別々のものとして無造作に区切らず、輪郭を超えて連続させ延伸させることによって生じる建築形態とし、真に有機的な建築を達成するための自然な手段と考えた。この理念が「新たな時代にふさわしい生きる建築、有機的建築、単なるひとつの様式に堕ちることのない自らの生命を持った建築、そしてまた人々の生命をまもり育てる建築へと進んでゆくはずのものであった」と。「レシピでもなく、定式でもなく、原理が作品のなかに移し入れられ作用するとき、そこには必ず真の様式が生まれる」という信念をライトは生涯持っていた感がある。

アメリカという大地はまさに彼の考え方を形にできる格好なキャンバスであったと言えよう。そして、20 世紀が生み出した建築資材、鉄とガラスがロイドの想像力を掻き立てた。建物の作り方の定石など一切いらない。「支柱、円柱、付柱などなど今までの建築概念は不要になり、構造体に付け足す後付け部材は一切不必要になる。……折れ曲がる面が登場し、線同士を融合させ、壁と天井を一つのものとした。広大かつ深淵なる単純性の諸相へと視野が開かれ、建物の調和が姿を見せた」のである。アメリカの大地は大いなる抱擁を以ってライトに応えてくれた。

ライトは岡倉天心の『茶の本』に感動し、生涯日本の浮世絵を収集し続けた日本愛好家の一人であったということは、彼の美学の骨子には、どこかに日本文化が生き続けていたのかもしれない。「建築家はいまやギリシアの空間像から解き放たれ、アインシュタインの空間像へと踏み込んでいけるようになったのだ。」とは彼の名言であろう。



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : <https://www.keikan-forum.org>

